

ビュヒアアの經濟發展段階學說と古代希臘經濟史

室 谷 賢 治 郎

## 目次

### 一、學說に關する論争

マイヤーの批評——フォン・ペローの批評——ヅムバルトの批評

——ロイザ・ルクセンブルクの批評——福田博士の言

### 二、ビュヒアアの古代希臘經濟史に關する勞作の概要

### 三、古代希臘經濟史に關する諸學者の最近の業績と其の立論

ハーゼブリーク——ブレンタノ——ドブシユ

### 四、結語

人類の經濟生活に於ける發展の規範を樹立せんとする企圖は、古來幾多の學者により試みられた所であるが前世紀の末葉獨逸ライプツヒ大學のカール・ビュヒアー教授の提唱せる經濟發展段階學說 Die Wirtschafts-entwicklung Theorie oder die Wirtschaftsstufen Theorie ほど學徒の注意を牽いたものは蓋し稀であらう。今日經濟學徒にしてアダム・スミスの分業につきて、リカルドオの地代につきて、乃至マルサスの人口につきての諸學說を知ると殆ど同様の程度にビュヒアーの經濟發展段階に關する學說を辨へざる者は莫いと言つて大過あるまいと信ずる。即ちビュヒアーが從來の學者が或は生産の觀點より（フリードリツヒ・リスト）、或は交換の觀點より（ブルノ・ヒルデブランド）經濟生活の發展に關する表式を示したるに對し、新に生産より消費に至る道程といふ廣汎なる觀點より經濟生活の發展段階を劃し、次の如く述べた事は後の學者に定說を賦與したかの如き觀がある。（註）曰く「此の發展全體を一個の觀點より捕捉せんと欲せば、それは國民經濟の本質的現象の眞唯中に突入し、同時に從來の經濟時期の組織的要素を吾等に解明する觀點でなければならぬ。即ちそれは貨財の生産が消費に對する關係、詳言すれば貨財が生産者より消費者に到る道程の長さによつて認識することに外ならぬ。而して此の觀點よりして、吾等は少くとも中歐及び西歐國民に對しては歷史上十分に精しく辿り得る限り、經濟發展全體を次の三つの段階に分つ。

一、封鎖的家内經濟の段階（純粹なる自己生産、交換無き經濟）。此の段階に在つては貨財は其の生産せられたると同一の經濟内に於て消費せられる。二、都市經濟の段階（顧客生産或は直接交換の段階）。此の段階に在つては貨財は生産經濟より直接に消費經濟に移る。三、國民經濟の段階（商品生産或は貨財流通の段階）。此の段階に在つては通例、貨財は企業的に生産せられ消費に到る前に多くの經濟を通る。」<sup>(4)</sup>

(註) 例へばプロドニッツはビュヒアーの經濟發展段階學說を以て「科學の共有財産となつた。——而して單に獨乙に於てのみならず國際的價值を有するに至つた」と爲して居る。(G. Prodnitz, Karl Bücher. Zeitsch. f. d. gesamte Staatsw. 90.

Band. I Heft. Tübingen 1931. S. 5.

然るに他方ビュヒアーの樹てた此の經濟發展段階に對して異論を挿む學者が少からず見られる。即ち歴史家の側よりはエドアード・マイヤー及びゲオルク・フォン・ベローの二人がビュヒアーの學說に有力な批評を下し、又經濟學者の側よりは古くはゾムバルト、近くはローザ・ルクセンブルクが痛烈な攻撃を加へて居るのである。

マイヤーの批評は、ビュヒアーが交換無き封鎖的家内經濟の段階に古代の希臘・羅馬を含めてゐることの非を指摘し、古代に於て如何に交換即ち商業が重要な役割を演じたか、而も商業が文化發展の云はば測尺を與ふる働因なることを論述したものである。ビュヒアーの經濟發展段階學說は最初一八九三年の「國民經濟の成立」に公にせられた。マイヤーは其の直後、即ち一八九五年フランクフルトに於ける獨逸歴史家協會第三回の講演會席上に於て「古代の經濟的發展」を論じ、古代の經濟をオイケン經濟 *Oikenwirtschaft* 詳言すれば自己

の欲望を自ら充足する個々の家計の自律的經濟と名付けたロードベルトスの見解を駁し、同時にビュヒアー説の絶對に斥けらるべきことを史實に照して明かにしたのである。曰く「極めて原始的なる状態に在つても商業即ち他の商品と己れの産物との交換は極めて重要な役割を演ずる。とまれ歴史上現はれる凡ゆる國民に於て、商業が文化發展の規準を與へる働因として示される。」<sup>(2)</sup>従つてマイヤーに由れば「古代の經濟的發展に就き描いたビュヒアーの畫は如何にも受取り難い。希臘の歴史に於ける第七世紀及び第六世紀は、近世の發展に於ては紀元後第十四世紀及び第十五世紀に照應し、また第五世紀は第十六世紀に照應するものである。」<sup>(3)</sup>「古代に於ては燦然たる文化と相並んで墮落腐敗せる政府及び慘忍なる戰爭が極端に發生し、而も甚だ進歩せる世界交通とビュヒアーの意味に於ける『國民經濟』が存在したのである。」<sup>(4)</sup>

是に於てかビュヒアーは、一八九八年「國民經濟の成立」の第二（増補）版を公にするに當り、序文の中に於て次の如く酬いた。曰く「余は余の論文の若干の部分に對し歴史家より加へられたる攻撃を記憶したい。諸氏は注意しなかつたけれども、本書に於て攻究せられたものは經濟理論であつて經濟史ではないといふことについて余は實際責任を負はぬ。數千年に亘る發展段階の範圍内に一定の國民の一定の世紀に於ける具象的狀況の微に入り細を穿つ底の敘述を期するものは、期待に背きたればとて非難してはならぬ。余は第一版に於て既に經濟段階の論理的性質を十分明かに表現したと信ずる。併しながら余は今、新版に於て當該箇所を將來願はくば最早誤解せられざるやうに捕捉する機會を得た。夫以上のことは當分余には爲し得ぬ。余は文獻的論争に

時間と力を費すべく最早若くはない。且又、余の發展學說の中核にとつては、余が希臘羅馬人の經濟を各個の點につき正しく特色付けたるか否か、また中世のツンフト手工業が賃仕事であつたか、價格仕事であつたかは全く無關係である。<sup>〔5〕</sup>

而してビュヒアーは右に引用した部分の序文を、「國民經濟の成立」の第三版（一九〇一年）を出すに當つても、附録に再掲して<sup>〔6〕</sup>マイヤー其他ベロー、ゾムバルト等の加へた論難に對へるところがあつた。

ベローのビュヒアーに對する批評は、マイヤーのビュヒアーに加へた辯駁を大體に於て裏書し、古代の希臘羅馬を家内經濟の段階に置くことの不當を攻撃すると同時に、ビュヒアーの都市經濟の段階の取扱ひ方に特に異見を開陳するものである。蓋しビュヒアーが都市經濟の段階に中世を想定し、此の段階に在つては貨財の交換が頗る限局せられたと説明するに對し、ベローは中世商業の高く評價せらるべき史實を具さに敘述するのである。併しながらベローのビュヒアーに對する批評は、決して峻烈ではない。寧ろ濫い同情をビュヒアーに寄せて居る。従つてベローは、ビュヒアーが國民經濟的研究と技術的研究とを結合すること他の著述「勞働と韻律」<sup>〔7〕</sup>に於けるが如く爲し、人類學をも參酌した點、中世都市經濟の本質を根本的に探究した點、而して明確なる概念を勻高く藝術的に表現した點に、ビュヒアーの功績を認め、「一著者の樹立せる専門的概念がかくも速かに一般に使用せられることビュヒアーの場合の如きは蓋し稀有の例に屬する」<sup>〔8〕</sup>と言つてゐる。

而してベローは進んで發展段階學說そのものの批評として、一般に歴史法則は可能なりやの問題に移り、ビ

ユヒアーが「國民經濟の成立」の中に前述の如く「少くとも中歐及び西歐國民に對しては（中略）經濟發展全體を三つの段階に分つ」と限定してゐることに向つて「若し斯かることを承認せねばならぬとすれば、最早此の學說の普遍妥當性は斷念せられねばならぬ。」<sup>(四)</sup>と論じて居る。畢竟ビュヒアーは「理論と歴史とを混同する」<sup>(五)</sup>ものと言はれるのである。

過去の經濟發展段階を家内經濟、都市經濟及び國民經濟の三つに劃する者は、將來に向つて世界經濟或は國際經濟の段階を想定するに難くない。然らば此の世界經濟の段階を想定する上に果して事實何等の困難を伴はぬであらうか。茲にも發展段階學說自體に潛む問題が見られる。ペローは此の問題にも觸れて居る。而してペローは世界經濟の段階を想定する上に次の二つの困難に遭遇することを説く。第一は、今日商品の國際的道程が國民的道程以上に優越し、重點が前者に置かれるか否かといふことである。然る場合に於てのみ、國際的關係は現在の典型的狀況以上に見られ、國民經濟・都市經濟及び家内經濟につき語ると同様の意味に於て國際經濟についても語り得るであらう。第二は政治的權力が全世界の交通を導くことに努めること、恰も都市經濟の時代に都市が交通を都市の範圍に限り、また國民經濟の時代に國家が活潑なる交通を國家の領域全體の内部に於て發展せしめるが如く爲し得るや否やの難問である。世界經濟を高唱するハルムスすら、世界經濟政策は單獨經濟間の國際干係が國家の國際的協約により規定せられて始めて發生すると言はざるを得なかつた點に顧みて、世界經濟の段階を劃することの當否を悟り得るであらう。<sup>(五)</sup>

然らば經濟發展段階學說そのものは抑も全く捨てられて顧られざるべきものであらうか。之を拾つて生かすの道は他に無いであらうか。ペローの批評は更に進む。

ペローは謂ふ。經濟發展段階學說は普遍妥當なる發展法則を與ふるものではない。幾多の場合には例外てふものがある。さりとして吾等は段階學說を樹立することの努力を決して無價値なりとするのではない。一定の時代に於ける一定の國民の經濟段階を他の時代に於ける同一國民の經濟段階に比し、或は同一の時代に於ける異なる國民の經濟段階を較ぶるとき、段階學說を樹立することに迫られるのは必定である。斯くて一方に共通的なるもの、規則的なるものと特殊的なるもの、離反的なるもの、他方に重要なるもの、本質的なるものと副次的なるもの、偶然的なるものとを分つ。特に歴史家に取っては事物の本質を正しく且つ鋭く決定することは必要不可欠の條件である。されば歴史家は段階學說に一應は耳を傾くるも、事物の規則的經過に關し若干の普遍的命題を樹つることには到底従ひ得ぬのである。而して茲に歴史的に重要なるもの、本質的なるものとは、各種の史的現象より生ずる共通的なるもの、規則的なるもの乃至正常的なるものと同一ではない。後者に對する單なる興味を以て満足するものは、歴史の生ける力を悟ることは出來ない。到る處に同様に行はれる發展傾向といふ如き前提、又は經濟生活に於ては到る處束縛より自由への繼續的發展生ずるといふ如き前提を歴史家が拒斥したればとて、其の歴史家を直ちに懷疑主義の立場に在るものと評してはならぬ。蓋し、斯かる前提は證明し得べきものでないのみならず、公平なる歴史研究よりする時は反駁を加へらるべきものだからである。要す

るに史的敘述の基礎は凡て史的概念に對するも將た無味乾燥なる個々の事實に對するも史的材料そのものでなければならぬ。是に由つて段階學說を觀るとき、如何に此の學說が歴史家に對する經濟學者の不當處置を物語つてゐるかを知り得る。實は歴史研究者と雖も外的の材料に固着するのではなくて、生活の幾多の形像を觀照する。構成的把握も亦歴史家の目指す所に屬するのである。凡そ眞の科學の最高の特徴が包括的判斷の各方面に妥當する且つ精密なる表明に在りとせば、歴史家の職とする所は、事實を精到完全に確定し因果的に結合し、超個的理念の下に整序し、客體の價値を發見することであらねばならぬ。歴史家は事實の觀察より構成するとは云へ、構成も亦其の目的とする所である。斯くて段階概念を利用することも歡迎すべき補助手段たることを失はぬのであるが、疑義の存する以上は到底用ひ得ぬ事となるのである。にも拘らず段階學說を生かし用ひんと欲せば須く各種の段階を理想型 *Idealtypus* と見て、之により一定の時代に於ける一國民の狀態を測り得るものと爲すべきであるとペローは論ずるのである。而して此の區別の必要はマックス・ウェーバーの明かに説いた所である。<sup>(12)</sup>

斯くてペローは畢竟、經濟發展段階學說をウェーバーの理想型概念に還元し歸屬せしめることによつて救ひ用ふるの途を拓かんとしたのである。然らばウェーバーの理想型概念とは如何。茲に之を説くことは本稿當面の問題を餘りに逸するの恐あるが故に、左にウェーバー自身の言ふ所を一二引用するを以て足れりとした

500  
(13)  
(14)

ウエーバーは曰ふ。「理想型概念は『假説』ではない。併しながらそれは假説の構成に方向を示すものである。それは現實の敘述ではない。併しながらそれは敘述に一義的表現を供する。」<sup>(15)</sup>また曰ふ。「人茲に『都市經濟』の概念を構成すとすも、それは云はば觀察せられたる全部の都市に事實上存在する經濟原則の平均としてではなくて、理想型としてである。それは一個の乃至は若干の觀點を一方的に遞昇せしめることによつて獲られる。又漠然不明此處に多く彼處に少く場所的には全然存在せぬ個別現象——之がかの一方的に擧揚せられたる觀點に従ふ——の幾多を夫自身統一的なる構想形象 *Gedankenbild* に包括することによつて獲られる。此の構想形象は其の概念的純粹に於ては現實に經驗的には何處にも存在し得るものではない。それはユートピアである。而して史的勞務にとつては各個の場合に、現實が理想形象と如何に近接するか或は如何に隔絶するか、即ち如何なる程度まで一定都市の状態の經濟的性質が概念的意味に於ける「都市經濟的」として語らるべきかを確定する任務を生ずる。併しながらこの概念は研究及び説明の目的にとつては、慎重に適用するとき其の特殊の任務を竭すのである。」<sup>(16)</sup>

此のウエーバーの理想型概念に助けを藉りてビュヒアーの經濟發展段階學說を理解し維持せんとする學者にペローの外に尙チニュービンゲン大學のロバート・ウイルブラント教授のあることは注意すべきことである。ウイルブラントは嘗てビュヒアーの段階學說を批評し、之が爲めには先づ以て一般に果して交換が有つたか否かを問題とせねばならぬことを論じ、封鎖的家内經濟にとつて特徴あることは一個の意志が凡てを規定し、他の

ものが彼との契約締結に於て計るべき機会を見出し得ざる點に在ると説いたことがある。而してウイルブラントは此の第一の經濟形態を名付けて專制經濟 *Allenwirtschaft* と言つた。(17) 然るに近時、ウイルブラントはビュヒアーの學説を救ふことに吝ならざる説を吐いて次の如く述べて居るのである。曰く「ビュヒアー自身は二三の個所に於て左のことを言つてゐる。即ち凡ての過渡的現象、即ち同時代に既に存在せるもの凡てを擧揚するのは問題ではなくて、特徴あるもの、決定的なるもの、大なる直線、發展法則、云はば一の時代に冠たり、之に刻印を與ふる所のものが問題であるといふのである。例へばマックス・ウエーバーが『理想型』と名付けたるが如きものとしてである。即ち現實には決して存することなく、また存することを要せず、唯だ研究の補助手段たる、夫自身窮極まで思考せられたる形象 *Gebilde* である。ビュヒアーの段階は斯く理解し維持すべきものである。」(18)

ウイルブラントのビュヒアーに對する態度は右の如く始めと後とでは幾分異り、後に至つては少からぬ理解を有することとなつたが、之に對し終始ビュヒアーの學説を攻撃して其の手を緩めないのはゾムバルト教授である。ゾムバルトは夙に一八九九年の「社會立法統計論集」に「工業労働と其の組織」なる一大長篇を寄せ、次いで一九〇二年其の劃期的大著「近世資本主義」を公にし、更に一九二七年「經濟生活の秩序」を著し、其の都度ビュヒアーの學説に觸れ、之を批評する傍ら自己の樹つる經濟發展段階を展開して居る。ゾムバルトの説く所に由れば、段階順位 „*Stufenfolge*” とは經驗的・歴史的繼起の意味に解すべきでない。(19) 従つてゾムバル

トは概念的分類により純粹の圖式を描くことに努め、「吾々は社會化 *Vergesellschaftung* の尺度を經濟段階の分類原理に選ぶとき、段階を樹てる要求に叶ふであらうと余は思ふ」<sup>(20)</sup> と言つて居る。

今、ゾムバルトのビュヒアーに加へた反駁をゾムバルト自らの口より語らしめるならばそれは次の如くである。

「余の反駁は若干の例を取出せば最も明瞭にせられるであらう。即ち中世都市の布製造者が市場やメツセに（尙附加ふるならば商人に）販賣した所の布、古い山間邊境の小さな鐵工業の製品、中世の鑛山より産出せる銀は、生産經濟より消費經濟に到る道程を經過せねばならなかつたこと、今日同様の製品が工場より裁縫師又は錠前師又は寶石細工師に到ると大小は無く、而も其の過程は當時と今日とで頗る異なる世界に屬する。上着靴等誂品を取扱ふ近世資本主義的商店より消費者の經濟への道程は中世に於ける夫等の道程より一步長いとは言へぬ。純粹無雜の顧客生産はクルツプや、其の他國家乃至公共團體に納品する營業である。凡ゆる近世の車輛製造、凡ゆる汽罐車工場も最も純粹なる「顧客仕事」を供せぬであらうか。而して此等の現象は吾々の時代に云はば特殊なるものではない。それはビュヒアー自ら最もよく知る如く大なる發展の傾向を示して居るものである。中間項を除去して消費者を生産者に近接せしめることは屢々注目せられる所であるが、之は吾々を中世都市經濟の組織に遡らしめるものであらうか。乃至「顧客關係」は恐らく頗る異なる經濟時期に屬し得るであらうか。パンは消費者の經濟に到る爲めに手工業者より、資本主義的パン工場より、消費組合のパン焼所よ

り將た軍隊のパン焼所より均しく長い道程を經過せねばならぬ。さりとて此の根本的に異なる四つの經濟組織は凡て同様に取扱はるべきであらうか。而も近世交換經濟の構造はビュヒアーの圖式には從はぬ。假りに今日の勞働特化を保留して生産する所の社會主義的組織の社會を考ふるとせば、多くの生産物にとつては生産經濟より消費經濟への道程は依然今日の如く遠いことであらう。仍て單に生産物が消費せられる前に經過する同一の長さの道程の故を以て、再び世界を異にする秩序を區別してはならぬであらうか。此の點に關してはビュヒアーも答辯し得ぬであらう。即ち今日、生産物は商品として生産せられやうとも、一の社會主義的協同體に於ては然うではなくなる。何となれば此の非難によつて彼は吾々の批評を正當と認めるであらうから。否、商品生産を力説することはビュヒアーにより然く公にせられた道程の長さよりも、區別に對して全然他の規準を取るからである。ビュヒアーの學説は何處より攻撃し得られるにせよ、要するに維持し得ざるものである。<sup>(21)</sup>

右に對しビュヒアーは前掲の「國民經濟の成立」第三版の附録に應答し、「ゾムバルトの例は大部分不當に作られて居る」と論じ、左の如く言つて居る。「勿論、最終の生産者より消費者に到る道程は、上の第一の例と最終の例とに於て中世都市に於けるよりも長くはない。併し之は全然問題ではない。問題は生産物が如何に最初、生産者より消費者に到るかに在る。羊毛や獸皮の生産者より消費者に到る道程は實際に中世の服や靴の道程よりも著しく長い。未成の服は之が裁縫師に到る前に、羊毛商人、毛洗滌場、紡績家、織布家、染色家、布商人等の經濟を通り、其の各所に於て利潤を吸収する。是が即ち資本の循環過程である。而してクルツプ、車輛

及び汽罐車工場——之等は消費者の爲めに生産してゐるのであらうか。夫等の生産物は生産物に先立つもの Vorprodukte 恒久的生産手段ではあるまいか。然らば何時から生産手段を其後の生産に用ふることが吾々の科學に於て消費として取扱はれるのであらうか。人の知る如く此等の反駁の例は仔細に觀察するや崩壊する。固より——而して此の點に於ては余はゾムバルトに讓歩しやう——余の三つの經濟段階は貨財が生産者より消費者に到る道程の長さによつてのみは區別せられぬ。併しながら余は此の型式を簡單に理解せしめんと欲して選んだのである。何となれば余は讀者の範圍に理解し易からしめんと欲したからである。(中略)余は、學問ば單に現に爾くあり嘗て爾くあつたことのみを取扱はねばならぬと爲す舊弊の人間に屬する。〔22〕

ゾムバルトの右に對する云はば逆襲は嚴しい。曰く「ビュヒアー教授は其の著書の第三版に於て余に對する反批判をかなり目立たしく公にしたる由である。腹藏無く言へば余は之を、ビュヒアーに對し余の抱く尊敬に顧みて遺憾とする者である。余の實質的議論は勿論個人的罵詈より生じたるものではない。其の反對に『友よ汝は粗野なる故に誤れり』といふ古い信すべき格言によつて證明せられるのである。〔23〕

而してゾムバルトは最近に至つても繰返しビュヒアーの學說を論難して毫も假借する所は無い。曰く、ビュヒアーの圖式は基礎薄弱である。假にビュヒアーの區別が正しいとしても、販賣行程の長さといふ特徴は經濟生活全般の状態を特色付けることは出來ぬ。それはビュヒアーの言ふ如く「國民經濟の本質的現象の眞唯中に」吾々を導くものではなくて、比較的附隨的なる事實に關はるのみである。加ふるにビュヒアーの學說は誤謬に

陥つてゐる。格言すれば事實と矛盾してゐる。蓋し販賣行程の長さは、種々の歴史上の經濟組織に在つても全然異つて居らぬからである。要するにビュヒアーは一方に吾々に用ふ可からざる區別の表徴を與へ、他方に內的聯關無きものに拘らず個別的表徴を擧げるものであるとゾムバルトは道ふのである。(24)

然らばゾムバルト自身の樹つる經濟段階如何と言ふに、既に一言したる如く社會化の度合に従つて 一、個人經濟 Individualwirtschaft 二、過渡經濟 Übergangswirtschaft 三、社會經濟 Gesellschaftswirtschaft と爲すのである。而してゾムバルトは之を次の如き表を以て示して居るのである。(25)

經濟段階

經濟組織

統一的經濟原則を有する經濟組織の集團

個人經濟(註)

- 一、原始の血族經濟
- 二、家屬共產體「大家族經濟」
- 三、經濟單位を有する擴大自己經濟
- 四、分離せる經濟單位を有する擴大自己經濟  
(グランドヘルシヤフト)

欲望充足經濟

過渡經濟

- 五、村落經濟
- 六、交換特に都市經濟

社會經濟

- 七、社會主義的經濟
- 八、古代の奴隸經濟
- 九、近世殖民地の奴隸經濟
- 十、自由賃労働を有する資本主義的交換經濟

營利經濟

(註) 個人經濟の名稱はゾムバルト自身拙いことを告白して居る。蓋し此の經濟段階は共產主義的特徴を帶ぶるものだからである。又「孤立」Isoliete 經濟と名付くることも感服し得ぬ所であると言つてゐる。(26)

ゾムバルトの批評よりも更に猛烈に半ば揶揄的言辭をすら用ひてビュヒアーの學說を攻撃する者はローザ・ルクセンブルク女史である。彼女はビュヒアーの描いた經濟發展段階の圖式を以て「何等含蓄するもの無しといふことにより興味がある」<sup>(27)</sup>と喝破し、唯物史觀の立場より稍々詳細に亘つてビュヒアーの學說に反對して居る。ルクセンブルクの言ふ所によれば、都市經濟といふ第二の段階は「吾々がライプチツヒの大學教授の『天才的活眼』を讚嘆するところの劃期的發見である。」蓋し、ビュヒアーの封鎖的家内經濟の特徴が、例へばマルク團體の如く經濟的欲望を充足する一團の人々を包含したといふ點に在りとすれば、中部及び西部歐洲の中世都市に於ては事態が正しく其の反對だからである。固より、中世都市に於ては何等共通の經濟無く、ビュヒアー固有の語法を以てすればツunft手工業者の工作所や家計といふやうな經濟存し、此の中に在つて各人は自らの爲めに生産、販賣、消費の業に従事した。併しながら全體について言へば獨乙及び佛蘭西の中世に於けるツunft都市は、決して排他的經濟領域を構成したものではない。何となれば其の存在は田舎との相互的交換に基き、都市は田舎より食糧品原料を仰ぎ、田舎は都市より工業製品を求めたからである。然るにビュヒアーは田舎をも都市經濟に含め、田舎に住居を構へて田舎に固有の經濟領域を樹立した所の富裕なる諸侯の賦勞圃歩 Fronhof の重要を、他方中世都市の運命を左右したと見られる海外通商と共に全然度外視して居る。且

又、ビュヒアーは商品生産は國民經濟の段階に始まると爲すけれども、之はブルジョア經濟學者の虚構に外ならぬのであつて、商品生産は既に中世都市に其の中心點を置いてゐたとルクセンブルクは述べるのである。<sup>(23)</sup>

ビュヒアーの封鎖的家内經濟の段階は、ルクセンブルクに従へば農民の村落團體と共に始まる。然るに、ビュヒアーは斯かる原始的のマルク共產體の外に、古代希臘羅馬の奴隸經濟及び中世封建制の賦勞圃歩を數へて居る。即ちビュヒアーは文化民の全經濟史を把握するに有史以前より古典的古代中世を通じ近世の闕に入らんとする迄を一括して生産の「段階」と爲し、之に對立せしめるに第二の段階として中世歐洲のツンフト都市第三の段階として今日の資本主義的經濟を以てして居る。別言すれば「ビュヒアー教授の經濟史に於ては印度の五河地方の山谿か何處かに其の靜かなる存在を保てる所の共產主義的村落團體が、アテネ文化の精華を發揮したペリクレス時代の家族制度や、中世のバムベルク地方の大僧正の封建的圃歩と同一の經濟段階に排列せられる」こととなる。其の誤りたるや云はば歴史の一頁でも讀みたる者でも知り得る所であらうとルクセンブルクは言ふのである。此の例について彼女の與へる説明を加ふれば、前者即ち共產主義者農業團體に於ては所有に關しても權利に關しても大衆の間には一般的平等が見られ、後者即ち古代希臘羅馬並びに封建的中世歐洲にあつては自由民と奴隸、特權者と無權者、主人と僕婢、富者と貧者といふ如き社會階級が形成せられて居る。前者には一般に勞働の義務が存するけれども、後者には大衆勞働者の隸屬と少數不勞者の支配とが對立する。尙又、希臘羅馬の古代奴隸經濟と中世封建經濟との間には著大なる差異があり、古代奴隸經濟が畢竟、

希臘羅馬の文明を没落に齎したるに對し、中世封建制は都市に於けるツンフトの手工業を商業と共に發生せしめ最後に斯くする間に今日の資本主義を生み出し出したのである。従つて此等凡て宵壤も嘗ならざる經濟的社會的形態と歴史的時期とを一個の概念、一個の圖式の下に齎さんとする者は、全然獨創の尺度を用ひて經濟時期を劃す者でなければならぬ。然らば譬へて見るに凡ての猫は灰色であるといふやうなビュヒアの「封鎖的・家内經濟」の斷案は如何なる尺度により下されたかと言ふに、ビュヒア自ら説く如くそれは「交換無き經濟」である。而して之に「直接交換の段階」としての中世都市及び「貨財流通の段階」としての今日の經濟組織が接続するのである。換言すれば、無交換、單純交換、乃至複雑交換——通例の語を以てすれば商業の缺如、單純なる商業、發展せる商業——がビュヒアの經濟時期に對し與へる尺度である。然るに商人が既に現はれて居るや否や、商人が生産者と同一人なりや別人なりやといふことが經濟史の主要根本問題であらねばならぬ。是に於てかビュヒアの「交換無き經濟」とは嘗て地上に見出されず、偶々古代中世に適用すれば愕くべき大膽なる歴史的幻想を示す所の教授的妄想に過ぎぬとルクセンブルクは貶するのである。尙、生産發展一般の尺度として生産關係を見ずして交換關係を見、商人の未だ全く存せざる所にも商人を經濟組織の中心點並びに一切の事物の尺度と見ることは何たる「概念的分解、心理學的抽離的演繹」であり、凡て「皮相に執する」ものを賤むものの何たる「事物の本質への突入」であらうかと嗤ふのである。ルクセンブルクより見ればヒルデブランドの爲したる如く自然經濟、貨幣經濟及び信用經濟の三期に經濟史を區分する方が、寧ろ眞理に近いと考

へられるのである。「ビュヒアーは始め一切の『古き同種の企圖』を鼻で遇らひ、後に正に同一の非難を受けたる交換てふ『皮相執着』を根本思想に採り、且之を單に術學的敷衍により全然誤れる圖式に歪めたまでである。」<sup>(25)</sup>

斯くてルクセンブルクは、ビュヒアーを攻撃すると同時にエルンスト・グロツセが「家族の形態と經濟の形態」(一八九六年)に於て試みたる所の一、低度の漁獲民、二、高度の漁獲民、三、牧畜民、四、低度の農民、五、高度の農民の區分、フリードリツヒ・リストが「經濟學の國民的體系」(一八四一年)に於て分ちたる所の一、野蠻狀態、二、遊牧狀態、三、農業狀態、四、農工業狀態、五、農工商業狀態の段階、乃至前記のブルノ・ヒルデブランドが「現在及び將來の經濟學」(一八四八年)に於て劃したる所の一、自然經濟、二、貨幣經濟、三、信用經濟の時期を以て凡てブルジョア經濟學の「皮相に執する」見解であると爲し、其の理由を説く。即ち、ブルジョア學者は史的考察の前面に交換・分配・消費を置き、生産の社會的形態詳言すれば各の史的時期に於て正に決定的なるものにして夫れより論理的歸結として交換・分配・消費の常に生ずべきものを置かぬが故に、やがて國民經濟即ち資本主義的生産方法を以て人間の歴史の最高最終の段階と考へ、夫以上の世界經濟的發展と革命的傾向とを否定するとルクセンブルクは主張するのである。女史は曰ふ。「生産の會社の構成換言すれば労働者と生産手段との關係如何の問題が經濟的時期の核心である。同時にそれが凡ゆる階級社會の弱點でもある。彼此の形式に於て労働者の手より生産手段を奪ふことは、凡ゆる階級社會の共通の基礎であ

る。蓋し之が一切の搾取と階級支配の根本條件たるが故である。<sup>(30)</sup>

右の如くして畢竟、ルクセンブルクはビュヒアーの經濟發展段階學說をマルクス流の唯物史觀に、ヘーゲルの語を藉りて言へば「止揚」Aufheben せんとするのである。唯物史觀の價值並びに適用に就ては當面の問題と觸るる所顔る大であることを認めざるを得ぬが、期する所他に存する本稿に於ては之を留保して可なりと思

ふ。<sup>(31)</sup>

終りに日本經濟學界の先覺福田徳三博士は嘗て「國民經濟原論」を著はされた時、「ビュヒアーは兩氏（マイヤー及びペローを指す）の攻撃に對し、希臘經濟史を著して自分の立場を明かにするといふことを公けに約束して居る。此ビュヒアーの希臘經濟史は未だ出版されないが、若し出版せらるれば再び學者間に議論の花を咲かすことであらうと思ふ。今日の所予輩はビュヒアーの此著の現はれることを只管待つて居るのである。」と書かれた。而して博士は博士の經濟學全集第一集經濟學講義の中に右の「原論」を収録するに當り、上に引用した「今日の所」の下に括弧を以て特に大正十四年と附加へられた。<sup>(32)</sup> 博士の「原論」は第一版を明治三十六年十二月東京哲學書院より刊行せられ、第二版を同四十三年一月東京大倉書店より刊行せられたものに係る。然るにビュヒアーは夙に一九〇一年、シェツフレの古稀誕生記念論集<sup>(33)</sup>に「希臘經濟史に就て」の一篇を寄せ、後一九二二年之を増補し自著「經濟史研究」<sup>(34)</sup>の卷頭を飾る論文として收載して居る。算ふるに一九〇一年は明治三十四年に當り、福田博士の「原論」第一版刊行に先つこと二年、一九二二年は大正十一年に當り、博士

の「全集」刊行の大正十四年よりも三年早い。余は此處に頗る興味を覚え、ビュヒアー自身の描いた「希臘經濟史」を繙き、之が經濟發展段階學說に對して有する交渉を繙ね、進んで最近頻りに公にせられる經濟史家の古代希臘に關する勞作の二三と併せ考へて見やうと思ふ。即ち本稿の目的とする所である。

## 二

「希臘經濟史に就て」ビュヒアーが特に研究の筆を執るに至つた動機は右見たる所により知らるる如くマイヤーの論難に應へんが爲めであつた。其の仔細を今少しく立入つて述べんに、前記一八九五年フランクフルトに於ける歴史家協會に於てマイヤーが「古代の經濟的發展」につき講演したる折、ビュヒアー自身は其の聽講者の一人となつて居つた。併しながら當日は講演に關する討議が無かつた爲めビュヒアーはマイヤーに直ちに酬いることが出来なかつたのである。間も無くマイヤーの右の講演が「經濟學統計學年報」誌上に印刷せられるや「年報」の編纂者はビュヒアーに紙幅を與へて駁論を書かしめんとした。然るにビュヒアーは駁論を書くに際し躊躇せざるを得なかつた。蓋しビュヒアーをして語らしむれば、「第一マイヤーは到る處經濟現象の皮相に執し、ロードベルトスの著作に對しては細緻鋭利なる概念分析を施したにも拘らず、經濟上本質的なるものを殆ど理解せず、従つて有效なる討議を爲すべき前提を與へて居らぬと余は信じたからである。次に余の發展史的段階を構成せる中歐及び西歐國民の範圍を超えて研究を比較人類學的研究に導き、文化を欠くか其の程度の低

い國民の經濟的特徴を闡明せんと努めた。而して終りに此の論争が公平なる古代研究家及び國民經濟學者に古代經濟史の領域に於ける特殊研究を促し、古典的文献や碑銘等に散逸せる材料を利用するに至るであらうと期待したからである。<sup>(35)</sup>然るに古代希臘の工業を取扱へる二つの佛文著作<sup>(36)</sup>が公にせられるや、ピユヒアーは之に刺戟せられて再び希臘の典據蒐集に着手した。而して此の場合常にピユヒアーの念頭を去來した省慮は「古の著者の中には人の殆ど氣付かぬ多くの注目すべきことがある」といふヤコブ・ブルツクハルトの一八六七年の書翰の一節であつた。ブルツクハルトは有名なる三卷より成る「希臘文化史」<sup>(37)</sup>に於て希臘人の思索方法及び人生觀に關する歴史を興へ、且つ希臘人の生活を動かせる力の認識を獲んことを課題とした史家である。ブルツクハルトに従へば、古代希臘人の生活状態と其の歴史の出來事とは夫自身の爲めに語らるべきものではなくて、一般的なるものに就ての審問の爲めにのみ語らるべきものである。何となれば吾等の探求せんとする所の事實は是亦事實たる所の思索方法なるが故であり、而も通常の歴史が有するよりも精密なる點に於て一段高き所の事實なるが故である。併しながら斯く觀察するとき典據は骨董的の知識材料による單純なる探求と全然異つて見られるのを常とする。斯くてピユヒアーはブルツクハルトの見解が如何に經濟學上の思索内容に關しても正しきかを信じ、自らの思想を展開せんとしたのである。即ちピユヒアーに取り何よりも奇異に感ぜられることは、希臘に於て國家理論が大いに發展したに拘らず經濟理論は倫理に蔽はれ頗る乏しいことである。而も此の乏しい經濟理論が殆ど全く私經濟の理論で占められ、國民經濟の理論は之を見出すに難い状態に在る。

是に於てカロードベルトスの唱へたオイケン經濟の理論を羅馬のみならず希臘にも適用して謬無しと夙にビュヒアーは説いたのである。加ふるに希臘人にあつては私經濟的見解が一般に經濟思想の根本形式を形成したとビュヒアーは希臘の哲人・詩人・史家乃至雄辯家の諸書より讀み取つたのである。然るにビュヒアーを刺戟した事實は單に是のみに止まらぬ。第二の事實が彼を捕へたのである。それはマイヤー其他ベロツホの如き古代研究家が何故に古代希臘の經濟を以て近世の國民經濟と本質上同種の組織なりと見るかといふ事である。古代希臘の經濟状態に關する史料として吾等に遺さるゝ所のものはクセノフオン、ツキデデス、アリストファネス等アツチカの記事家である。又プラトーン、アリストテレスも其の一般的經濟思想に於ては全然アテネの地に根ざしたものであり、更に降つてはプルターク、ディオドル、アテナイオスの如きもアテネの著作者を取扱つて居る。然るに外見のみを觀察するときは基督紀元前五世紀及び四世紀に於けるアテネの經濟生活は現代と甚だ類似せるが如くである。されば此の觀察を普遍化し以て此の現象を希臘全土に擴張せるものと見る者の存するの敢て異とするに足らぬ。ビュヒアーは此の點を第二に明かにせんとする意圖を抱くのである。更に第三の觀察としてビュヒアーを動かしたことは、經濟史の資料が從來主として「希臘古代研究者」の觀點よりして蒐集整理せられたことである。此等の古代研究者に取り價值あるものは單に事實である。即ち大なるものと小なるもの、恒久的なるものと一時的なるもの、典型的なるものと偶發的なるもの、重要なるものと然らざるもの、の類である。然るに是によつては極めて細微なる内的聯關を明かにし、吾等とは異なる希臘精神をば外的生活

の凡ゆる現象に表はるる統一として敘述し且又一定の生活範圍に於ける其れの表現を統一的に捕捉することは殆ど不可能となる。従つて特殊研究者にとつては史料の大部分は摘要より摘要へと轉々することとなり、一朝誤解が傳へられんか誤解は更に誤解を生むことを免れぬのを常とするのである。此の點よりするにブリュムナール及びビュクセンシュツツの著作と雖も、<sup>(38)</sup>「史的發展を觀察する企圖は未だ嘗て試みられなかつた」といふマイヤーの言の例外を爲すものではないとビュヒアーは述べるのである。而もビュヒアーの見る所によればマイヤーはブリュムナール及びビュクセンシュツツ兩者の整へた資料を殆ど襲用したに止まるのみならず、屋上更に屋を架しマイヤー一流の誤謬をすら之に加へたものに外ならぬ。蓋しマイヤーは凡ゆる時代に區別無しに集めた材料を歴史に轉換したからである。

是に於てかビュヒアーは一つの希臘經濟史に關し筆を執る責務を感じ、之によつて古代希臘人の經濟思想をも正しく理解せしめんとしたのである。舊き家の跡へ新しき家を建てんとする者は先づ舊き家の土臺より破壊せねばならぬ。是れ即ちビュヒアーが劈頭筆を批評の方面より起す所以である。而して彼が先づアテネを考察の中心に置いたのは、蓋しアテネに於て古代希臘の經濟が其の最高點に達したとは古今の學者の一致するところだからである。又、彼が考察の時期を基督紀元前五〇〇年代より三〇〇年代に限つたのは單に便宜の上より出でたるものに外ならぬ。

既に見たやうにビュヒアーの經濟發展段階學說に従へば、封鎖的家内經濟の段階に屬せしめられる希臘にあ

つては純粹なる自己生産營まれ交換は之を缺くのであるから、近世の如き大工業の發生すべき餘地無く且つ外國貿易も大規模に行はれ得なかつたとの結論に到達せざるを得ぬ。之を史實に照して基礎付くる爲めビュヒアーは如何なる方法を採つたかと言ふに、彼は先づマイヤー及びペロツホを祖述する伯林大學の歴史學教授ブライヅツヒの所説を批評の俎上に拉し來ることから始めるのである。ペロツホが希臘史、就中希臘人口史に關する權威なることは既に隠れもなきことに屬する。彼は一八八六年「希臘羅馬世界の人口」<sup>(39)</sup>を著し希臘に於ける經濟狀態を詳述するに用意周到にも人口統計より出發し、次いで一八九三年「希臘史」第一卷、一八九七年其の第二卷<sup>(40)</sup>を公にし希臘本土の歴史のみならず希臘の有した植民地の事情までも描くに當つては具さにツキデデス、リシマス等の斷片的記録をすら參酌した史家である。此のペロツホ及び先のマイヤーにより播かれたる種を巧みに結び合せたとビュヒアーに言はれる所のブライヅツヒの語は次の如くである。

『ペルシアに對する最初の自由戰爭以來アテネには非常な物質的繁榮が現はれたものの如くである。工場が勃興する。それは固より近世の工業施設と範圍に於ては測るべからざるものであるが、併し二十人乃至三十人の勞働者を有する大經營によつて優に他に見られる小工業に抜んでたものである。工業、商業及び海運の對外移動に對する最良の測度は——但し農業は通常屢ある如く技術上全く不活潑に止まつた——アツチカ及び他の著しく進歩せる地域に於て奴隸數の示す非常に多くの數である。——』

唯だ第四世紀は第五世紀を完全に凌駕した。即ち第四世紀は物質上の最盛期である。之を社會史的に説かん

に先づ此の時期はより高き發展段階に到る著しき經濟飛躍の他の時期と同様に有能の士又は資産家に何よりも利益を齎すのである。されば既にペロポネサス戰爭の終る頃にはアテネに百二十人の勞働者を用ゆる工場が發生を見る。奴隸經濟が工業に於て從來知られざりし範圍にまで擴張せられる。經濟的に勞働せる財産の大なる蓄積についての最良の證據、即ち分離及び自己の金融業の繁榮は欠けて居らぬ。：：國家は關稅及び租稅を私人に請負せる。換言すれば業務が廣汎なる範圍に亘つて營まれたのである。加ふるに此の種の業務のため、又船舶共同組合業務のため、夫自身既に進歩せる資本主義的國民經濟と見るべき經營形態が形成せられる。斯くて第四世紀の中葉には金本位制が行はれ、貨幣價值は低落し物價は騰貴する。而して大資本家は此の過程に於て大部分參與するけれども、弱者及び貧者にも亦之が均霑せしめられる。即ち賃銀は騰貴し、多くの大企業の榮える所には全くとは云へざるも略ぼ完成爛熟せる國民經濟の發展階梯が多くの小企業にも尙利潤の餘地を與へる。兎に角斯かる急速多様の收益法の發見といふ物質上の過程は凡ゆる方法に於て個人及び其の獨立心を促進する。

而して注意すべきことは事實上強者が茲にも先づ利潤につきての獮子の割前を奪ひ既に弱者を組織的に搾取し始めたと云へ、大衆の個人主義（ピュヒアは茲に感投符を附けてゐる）は社會鬭争により抵抗せざるを得ぬに至つたことである。<sup>〔五〕</sup>

然るにピュヒアの詮鑿する所によれば、ブライジツヒの言ふが如きペルシア戰爭直後「二十人乃至三十人

の労働者を有する工場」に關する典據は一も見出されぬ。唯だ戰後約百年を経たる三七七(六)年に死せるデモステネスの父が二組の工業奴隸を遺したといふ事が知られてゐるのみである。其の一組は三十二乃至三十三の *Maxupotoloi* であり他の一組は二十の *Xylopotoloi* である。即ち前者は財産であり後者は抵當である。之を見てブライジツヒが立論したものとすれば、果して斯かる奴隸の組が其の所有者により利潤追及のため使用せられる方法を名付けて工場經營と言ひ得るや否や疑問とせられねばならぬとビュヒアーは説くのである。

然らばペロポネサス戰爭の終る頃の「百二十人の労働者を用ゆる工場」は如何と言ふに、之についてはペロツホも次の如く述べて居る。

「斯くして希臘はペロポネサス戰爭の時以來益々工業國となつた。而も夫自身又は少數の補助者を以て労働せる小さな手工業者の代りに奴隸經濟に基く大經營が彌々益々現はれ來つた。ペロポネサス戰爭の終りにはアテネには百二十人の労働者を使用する工場が見られた。二十人乃至三十人の労働者を有する經營は既に顯著だつたのである。」<sup>(42)</sup>

併しながら之亦ビュヒアーをして言はしむれば出典不明に屬する。ペロツホの與へる出典によれば之は雄辯家リシアスが肉親のポレマルコスと共にピレウスにある家にて營みたる盾製作場に於て紀元前四〇四年の終、又は四〇三年の始め財産を三十の僭主より褫奪せられた時の事に關はる。此の工場に百二十人の奴隸が使用せられたといふ記録は確かに残つてゐる。にも拘らずビュヒアーを以てすれば之は如何に古代の文章家に見られ

る經濟史的資料が解釋を誤られてゐるかの興味ある證左を與ふるものに外ならぬ。蓋しビユヒアーの吟味に従ふときは右の盾製作場に關し記されてゐる箇所はリシアスがエラトステネスに語つてゐる第八節と第十九節とに見られる。即ち僭主の使者がリシアスを家に逮捕し、使者の或者は製作場へ闖入して奴隸數を検記したことと、リシアス兄弟の所有物件を暴君が横領したるに中に七百の盾と百二十人の奴隸があつたことを指すのである。之を結合して「百二十人の勞働者を有する盾工場」と稱すれば時恰もペロポネサス戰爭の終る頃と一致して正しく有り得べきことの如く考へられるが、併し此の場合リシアスが奴隸の損失を總數で百二十と言つたことを顧ねばならぬ。別言すればリシアスは之を以て製作場に記入せられた數であるとは言つて居らぬのである。リシアス兄弟はプラトーンのポリテイアの始めに美はしく描かれて居る如き富裕なる暮しを營んだものであるから、右の百二十人の奴隸中には必ずや家事に従事せる不自由僕婢が含まれて居たと見ねばならぬ。而も其の人數が幾許なりしかは知る由も無い。恐らくは百二十人の大部分が僕婢として控除せられ、残りの一部が盾の製作に従事したのではあるまいかとの疑念すら抱かしめらるゝのである。

尙又右のリシアスの盾製作場が抑も存立したるものであるか否かも疑はしい。假令存立したとしても一時的の設備ではなかつたかと思はしむる節が残つて居る。即ち寡頭政治の反對者たりしリシアスが同志と共に暴力を以て顛覆を企て、之が僭主の憎惡を受けたと見られるのである。事實リシアスはトランプロスを自由ならしむる爲めに四〇三年の冬二百の盾と二千ドラクマの現金とを提供したことさへあるのである。

之を要するに甚だ不確實であつて、希臘に於ける其他の著書や碑銘にもアテネの國家に百二十人の労働者を有する「工場」なるものがあつたと記したものはピユヒアーには見當らぬ所である。従つてリシアスの經營が存続したものと假定しても、それは唯一のものであるから其の以後工場經營が増加したといふ推論の如きは自ら崩壊せざるを得ぬ。況んや「百二十人の労働者を有する經營」を複数に用ふるが如きは以ての外であるとせられる。當時「二十人乃至三十人の労働者を有する經營」が存したか否かも當然に知らるゝ所ではなくなる。されば當時の裁判記録に材料を仰ぐも、労働者の數を知り得る經營は三つあるのみである。上に述べたデモステネスの相續せる三十二人の労働者を有する經營、二十人の經營、及びアイシネスにより名付けらるゝ十人乃至十二人の工場奴隸を有する靴製造經營が即ち是れである。夫故、此等の數字を基礎として何等かの結論を下すべしとせば寧ろペロポネサス戰爭以後、工業上の奴隸經營は大となつたよりも小となつたと言はねばならぬとピユヒアーは斷するのである。

斯くしてピユヒアーは進んでペロツホが「古代に於ける大工業」<sup>(43)</sup>に就て論じた所にも批評の矢を放つ。ペロツホは謂う。

「第七世紀及び第六世紀に始まつた希臘の大工業の發達は第五世紀に至つて完成を見た。而して今や吾等は此の現象を手許に直接に有する證據により辿り得る。最も多くの資料は謂ふまでもなくアテネに就てである。吾等は第五世紀の中葉既に茲に富裕となれる工業經營者を見出す。即ち煽動政治家クレオンの父クレアイネトス

の如く、後に息の繼承せる革乃至靴工場を既に有した者である。此の階級の人々がペロポネサス戦争の時代に大部分國家の指導的地位を占めたことは工業經營者の社會的重要の益加はりたる徵候である。斯くてクレオンの外に同様に製革の經營を以て富裕となつたアニトスあり、ラムプ製造業者ヒェルボロス其他がある。諺に所謂藝は身を助くであるが、併し小さな手工業のみを營む者は富裕となり得ず、従つて吾等はクレオン及びアニトスの製革業を以て大經營と考へねばならぬ。イソクラテスの父テオドロスが營んだ笛工場も同様である。蓋し彼も *Leturgien* と稱する尊稱を受け得たからである。斯かる經營の擴張に關しては吾等は具體的の報告を有たぬ。」

クレオンが革の製造業者又は革の販賣業者なりしこと並びに其の父がクレアイネスと呼ばれたことに就いてはアリストファネスの確證がある。然るに當時音樂の指揮を爲したる人にクレアイネトスといふ名の者があつたことは明かで之がペロツホにあつてはクレオンの父と混同せられるのである。又、クレオンの父が富めりとせばクレオン自身も尋常の製革業者に非りしなるべく既に工場を有してゐたに相違無いのである。而も「第五世紀の中葉富裕となれる工業經營者」(複數)がアテネに住んだと爲し、內的聯關の不確實なる二つの有り得べからざる事實よりしてアテネの工業發展全體を代表せしめんとするのは、若し希臘人をして今日在らしめば驚倒せんのみとビュヒアーは述べるのである。クレオンの社會的地位に關してはペロツホ自身「希臘史」第一卷に於て「富裕なる製革業者」なりとし、同時にまた「教養無き成上り者」としたが、之はツキデデス及びアリ

ストファアネスの爲す所と轆を一にするものである。さりとしてクレオン自身革に油を加へ或は革を切ることを爲さなかつたと信すべき理由は無い。他方、アニトス及びヒペルボロスが大工場主に非ずして小工業の經營者たりし事も古代の文獻の證する所である。

何れにせよ古代に於ては今日の如き工場主の典型は全く知られざる所であつて、イソクラテスの父の所有したといふ笛工場の如きは寧ろ滑稽の例を示すものと謂はねばならぬ。何となれば之は奴隸を用ひて家計の爲めに爲したるものに外ならず、且つ今日とて殆んど全く小工業により營まるゝ笛の製造が紀元前五世紀のアテネに於て工場組織を有したとは如何にしても信じ得ぬからである。固より奴隸を用ひて美術品の製作を爲さしめた工業部門の他に存した事は否定し得ぬ所であるが、併しそれは財産投下の見地よりして爲されたものであつて、工業的企業の見地よりして爲されたものでないことを知らねばならぬ。而してかゝる奴隸の外にも尙他種の財産を有したる人々のあつた事を忘れてはならぬ。

斯くの如くであるから、ベロツホがアテネの事實のみを見て直ちに「希臘は益々工業國となつた」と主張するのはピユヒアーより見れば全然即斷であり、小さな手工業者の代りに奴隸經濟に基く大經營が現はれ來つたとするのも更に甚しき獨斷であるとせられるのである。ピユヒアーに取つてはアテネには既に洒布工、靴工、大工、鍛冶屋、農民、鋤作人等の一揆となつて寧ろ「手工業者問題」が存したと考へられるのである。

さてアテネに大工業の發展を見た主張する論者に取つては當然に對外貿易の繁榮を敘述すべき義務を負は

せられる。蓋し四十平方哩の瘦地に稠密なる人口を擁する所に在つては食料品の大部分は之を他より仰ぐべきこと、而して自らの工業品は之を消費するも餘剰を生ずべきことは明白だからである。然るにマイヤーは何等確證を擧げずして之を論じ、ペロツホも亦之に附和するかの如くビュヒアーには見ゆるのである。ペロツホはピレウス港の對外商品交易の統計を輸出入價格に従つて次の如く説く。<sup>(44)</sup>

「基督紀元前四〇一—〇年に於けるピレウスの輸出入税は三〇タレントにて請負はせられ、其の翌年は三六タレントになつた。此の税は二パーセントの高の從價税である。従つて請負の収益は一五〇〇乃至一八〇〇タレントの輸出入商品の價格に相當する。之に徵稅費、脱税、無税の入荷、租稅請負人の利益等を加算するときは、約二〇〇〇タレントの價格の貿易があつたこととなる。さてアツチカのタレントの價格は(二六砵)銀をペルシアの跛行制の基礎に従ひ「*talent*」の割合にて金に換算して五四四〇・五マルクに當る。従つてピレウスに於ける貿易額は約千百萬マルクに計算せられる。當時の貨幣價值を今日の三分の一に評價するときは略ぼ適當な算定が爲されるであらうから、右の千百萬マルクを今日の貨幣價值に見積れば、少くとも三千三百萬マルク恐らくは四千萬マルク以上に相當するであらう。」

進んで當時のアツチカの人口を十五萬と推算した上、ペロツホは輸出入の一人當りを二二〇—二七〇マルクとして計算し、之を丁抹の一人當り二八〇マルク及び獨乙の一人當り一五六マルクと比較して居る。曰く「ペロポネサス戰爭の終熄後アテネは最早何等の貢納を同盟市より受入れず、銀鑛も廢滅したから、アツチカは其

の輸入額を支拂ふに自らの工業及び農業の生産物を以てせねばならなかつた。従つて輸出と輸入との價格を等しいと見て太過無い。斯くて輸入は一人當り一二五マルクとなり奴隸(約五萬)を除外すれば二〇〇マルクに達したのである。：：然らば珍奇なる天産及び著しく特殊なる工業製品は殆んど貿易品たり得ずといふピユヒアの主張と之は如何に調和せらるべきか。五人の家族が平均一〇〇〇マルクを奢侈品に使用したと信すべきであらうか。：：畢竟するに輸入は今日の工業國に於ける如く食料品及び工業原料品に見られたのである。之れ屢々餘りにも多く直接確證せられる所である。：：輸出に關しては農作物の中より油のみが注目せられた。其他は工業製品であり、而も價格も大なる故主として一般の消費する商品であつた。」

之に對しピユヒアは先づ五十分の一税の記述を批評の埒内に据える。然るに之に關しては實證的研究を成したるベツク<sup>(45)</sup>すら通過貿易の場合並びに陸上交易の場合如何に取扱はれたかの難問を藏することを知らしめて居る程であるから未だ猝かに斷定し得ぬ點が存する。且つ其の徵税に際して價値の算定を如何にしたかは更に問題とせられる。若し輸出入の申告により算定せられたとせば申告が十分ならざる場合の罰金があり、他方徵税吏が評價の權利を有したとせば欺偽の場合の罰金がある。其他港の設備を利用する爲めに徵收せらるべき費用あり、五十分の一税と相並んで百分の一税といふものがあつたと謂はれ、五十分の一税と同一視せられることある港金といふものあり、之を要するに五十分の一税の總和を基礎としてアツチカの輸出入貿易額を計算するのは頗る不用意であると考へられるのである。

況んや四〇一—〇年に於ける請負額を三〇タレント、四〇〇—三九九年に於けるものを三六タレントと計上するが如きは、當時の記録の虧損して居る箇所なることに顧るとき、果して右の額が一年間のものなりや若しくは三年間に亘るものなりや疑を容るゝ餘地を存するのである。斯く根底となるべき數にして動搖するものならば爾餘の計算は譬へば詩人の空想の如きものに化し信憑し難きものたらざるを得ぬ。例へば四〇〇年頃のアツチカの人口をベロツホは十五萬乃至二十萬と計算するも、近時二十五萬と數ふる者あり、他方ベツクの如きは五十萬と算し、其他六十萬以上と見る者がある状態に在る。又、アツチカのタレントをベロツホはペルシアの跛行制に據り *137:1* と換算して之を獨乙貨幣に見積つたけれども、ベツクの爲す所では右の割合は *15:1* となり、従つてピレウス港の貿易額は千百萬マルクに非ずして九百萬マルクとなる計算である。更に又、紀元前四世紀の始めに於けるアテネの小麥の價格と一八三一—一八七五年に於ける倫敦の平均價格とを比較したるに、後者の方が三分の一高きことが證明せられたのであるから、アテネの貨幣價值は今日の三分の一と想定すべき理由が示されるのである。

ベロツホは輸出入の品目を擧ぐるに當り、食料品、原料、工業品等今日の意味に於けるものを指示して居るが、茲に二つの錯誤を犯すとビュヒアーには考へられる。即ち一はピレウス港に於て五十分の一税が徴收せられたにせよ、其の貿易は對外的のもののみならず、アツチカの沿岸貿易が根本となつてゐたことをベロツホは看過してゐる點である。蓋し山地の多いアツチカに於て陸上運送の困難は必然的に沿岸貿易を生ぜしめたこと

は明かだからである。二は奴隸の輸入をペロツホが注意せぬ點である。

クテシクレスの證する所によれば三〇九年アテネに於ける奴隸數は四〇萬あつた。然るに他方之をペロツホの如く十萬と見積る者のあるのは、成年男子の奴隸のみを考慮する場合であつて、未成年の男子及び女子の不自由民を加算する時は大體に於てベツクの主張する三十萬五千人と見るのが適當とビュヒアーには信ぜられる。さればペロツホ及びマイヤーの如くアテネの市民及び居留民の數につきてはクテシクレスに據り乍ら、奴隸數に關しては之を採らぬのは徹底を缺くと評せられるのである。さてアツチカの奴隸は現代の希臘王國の人口よりは死亡率が高かつた。現代の希臘に於ては一八八四—一八九三年に於て年々千人につき平均二一・六の死亡統計が示されたから、當時のアテネの奴隸數三十六萬五千につきては約七千九百の死亡數を推定し得る。然るに奴隸はマイヤーも認むる如くアテネに於ては結婚する事を許されて居らなかつたから、其の不足は輸入によつて補はればならなかつた。其の數を年々六千とビュヒアーは數へるのである。而して當時アテネには奴隸市場 *τὰ ἀγορᾶν* と其の以外に日常業務としての奴隸賣買人 *ἀγοραπωληταί* とがあり、之により年々二千人の奴隸が取引せられたと考へられる。此の二千人は再輸出せられたるが故に、計算に於ては倍加せられねばならぬ。尙又アテネが古代希臘の交通の中心地であつた點よりして、外部よりの遊覽者、商人等が召使として伴ひ來つた奴隸 *ἀξόλοι* のあつた事も見逃してはならぬ。上に一言したやうに古代アテネの貿易を今日の丁抹のそれに比し、他方アテネの小麥の價格を倫敦のそれと對せしめる事が許されるとせば、アテネに於け

る外人交通を今日の瑞西に於けるそれと較べることも可能とせられるであらう。瑞西に於ては遊覧客接待協會成立後、季節には年々五六十萬の遊覧客があるといふから、今此の十分の一即ち五六萬だけアテネの當時に存したと假定する時は、五人中の二人が奴隸だつたと見て奴隸數は二萬乃至二萬四千となる計算である。之を倍に計算すべきは右の再輸出の場合と同様である。

斯くて  $6000 + 2000 \times 2 + 20000 \times 2 \parallel 50000$  の奴隸が出入し、徵稅請負人は之より五十分の一稅を徵收したのである。一人の奴隸の價格はアテネに於ては二ミーネを普通としたから、奴隸賣買の總價格は  $2 \times 50000 \parallel 100000$  ミーネとなり、其の五十分の一稅二千ミーネは  $2000$  タレントに當る。而も此の額にはベロツホの謂ふ「一般の消費する商品」や油類の輸出額は全然算入せられて居らぬのである。

ベロツホはアテネに於て「ヘルミツポスの輸入品目」を參酌して居る。之はベリクレス時代の喜劇詩人ヘルミツポスがディオソスの齎した貨物を述べたものであつて、商業史の資料としては注目し値するものである。曰く「キレーネよりはツキヌキヲグルマの莖 *Siphionstengel* と牛皮、ヘレスポントよりは鯖と鹽魚、伊太利よりは小麥と牛の肋骨、トラキア王シタルケスよりはスパルタ人に對する屑鐵、マケドニア人ペルデイツカスよりは虚言の船、シラクスよりは豚と乾酪、埃及よりは帆と紙が来る。クレタはキプロスに神殿用の物を、リビアは販賣用の象牙を、ロードスは甘美なる夢を結ばしめる所の乾葡萄と乾ける無果花とをを供する。オイボイアよりは梨と肥滿せる山羊、フリギーよりは奴隸、アルカデアよりは傭兵が来る。パガサイは奴隸と焼印

ある盜賊とを、パフラゴ人は粟と油質の巴且杏とを、フェニキア人は棗椰子と良質の小麥粉とを、カルタゴ人は毛氈と彩色ある枕とを送る。併しながら之は素と諷刺として語られたるものと見るべきであつて、ペロツホの如く忠實に之を信すべきものではないとビュヒアーは解し、右の中工業原料品として擧げられるものはキレ―ネより牛皮のみであると指摘するのである。

ビュヒアーによればアテネが海外より齎した商品は三つある。穀物、生活享樂品及び造船材料が是れである。穀物の輸入は第四世紀に於ては法律の定むる所に委ねられ、アツチカに住む船主はアツチカの集散地以外に穀物を運び去ることを許されざるに至つた。又海上冒険貸借もアテネに穀物を持歸らざる船には與へられぬこととせられた。アテネがヘレスポントを領したる時には、許可無くして穀物を此地より他へ持ち去る事を許さざる旨の命令を出した。同様の確證は造船材料の場合には乏しいけれども、何れにせよ輸入品には國家の計慮に俟つ所が多かつたことを認めねばならぬ。さればデモステネスの冒険貸借に關する裁判記録を見るも、復航に通常穀物を齎した船が或時干の牛皮を持來れることあり、また或時二三の山羊の皮、一二の羊毛の捆、及び十一二樽の鹽魚をポントスより舶載せることがあつたが、之を工業原料品の輸入と見るべく餘りに懸絶して居ることは何人にも容易に會得せられる所である。

アツチカの輸出品としてペロツホの擧ぐる所にもビュヒアーは賛意を表し得ぬ。固より農産物として重要なものが油であつたことは之を認めるが、併し一般の消費の爲めの工業製品が輸出に向けられたとはビュヒア

一の知れる限りでは古代に於て論じた者が無い。或は陶器がポントス、フェニキア、埃及等に送る酒を盛るために輸出せられたと考へられるが、之とても他の酒の買手により驅逐せられたことを想へば直ちに首肯し得ぬこととなる。他方ベツクはアテネの武器が諸外國の需要を充足する爲め供給せられたと主張するけれどもはチマルコスに法律に基いて論ずるのみである。此の法律はフリツポスに武器乃至船具を供給する者を死刑に處する旨を規定したものであつて、之により輸出に關する直接の證據を見んとするのは早計に失する。即ちアツチカ固有の形式と善美とを具ふる生産物としては密入菓子、香油、酒盃、胸鎧、陶器の像、靴等を擧ぐべきであるが、アテネを訪ひたる旅人が土産物として國外へ持去ることはあつても、此等の生産物の生産者自身又は輸出商が輸出を營んだと見るべきではないとビユヒアは力説するのである。

ペロツホは貿易理論に於てマーカンチリストの觀念に支配されて居るものの如くである。彼はヒューム及び其後ベツクが、アテネに於ける利率の高さを以てしては工的企業の發達し得ざりしこと、*Leiturgien* がアテネ市民の資本形成を著しく困難にしたこと、且又工業製品の規則的輸出を成立維持せしめんが爲めには永續的平和状態を必要とすることを注意したにも拘らず之を理解しなかつた。アテネが第五世紀及び第四世紀に平和を享くることの如何に少かりしかは、ツキデデス及びクセノフオンの戦争と平和との國民集會に關する記録によつても知られる所である。然るに時の意見發表に際し、アテネの大工業の輸出を有利なりと暗示した者は一人も見當らぬ。之に反して戦争により收獲を害せられ、農地を荒らされ、貯藏物を奪はれた農民の困憊が主とし

て訴へられて居る。アリストファネスの「平和」の歌を讀む者は農民や手工業者の欣喜雀躍を察し得るのである。而して此の手工業者の中には兜の飾毛製造人、劍磨師、槍磨師、喇叭製造人、鋤や大鎌の鍛冶工、製陶工等が擧げられて居るのを見るけれども、大工業や工場労働者や商品輸出等に關しては何等述べられて居らぬのに着目せねばならぬ。

固よりアテネは古代人の稱揚する地の利を占め、政治上の地位と相俟つて人事交通の中心たりしのみならず、其の港も盛時には希臘全土に比類無き程の貨物の集散を見た。併しながら是れ輸出入の強制によつてであつた事は、クセノフオンの名に於て第四世紀の中葉書かれた書に明かに言はれる所である。さればポントス行きのアツチカの商船は屢々空船のまま出發し、コス、タソス、パペレトス、又はメンデにて酒を積荷として受入れた。且つアツチカの商業中心地は地中海の輸出品を仕向ける場所となり、穀物、造船材料、鹽魚、赤土等を茲に齎した者は其の船に埃及、キプロス、シシリー等よりピレウスに持來れるアツチカ以外の生産物を積込み得た。但し一般にアツチカの商品交易を考ふるときは奴隸以外に常に農産物即ち原料品があつたのであつて、工業製品は決して無かつたことを銘記せねばならぬ。古代アテネに於ける對外貿易は正に斯く觀すべきものであるとビュヒアーは教へるのである。

翻つてアツチカに於ける私經濟を觀察するに、アテネ人は經濟上の事柄に關して特殊の態度を示して居る。アリストテレスの謂ふ所によれば「アツチカの家計は合目的である。即ち物を賣つては買込み、小さな家計に

は貯藏所を有せぬ。<sup>(46)</sup>之はペルシア人及び等しく希臘人の中でもスパルタ人の爲す所と趣を異にする點であつて、貨幣經濟と自然經濟との區別を示すものと謂つてもいい。然らば斯かる相違は何に由つて生じたかといふことが問題とせられる。アツチカは他の希臘諸國よりも經濟的發展に於て優れ、住民が特殊の商品生産を有し相互の交換を營む所の純然たる交易經濟を營んだものであるか。或は又封鎖的家内經濟の埒内に留まつたものであるか。アリストテレスの見解は單に經濟の消費の方面即ち家計につきてのみ論ぜられて居るやうであるが、併し他方アツチカの海上同盟が種々の權益を齎らしてアテネの住民の一部の經濟を支持したることを述べて居る。<sup>(47)</sup>此の數は約二萬人と計算せられる。即ち是れは支配者が被支配者を搾取して生活する一般的事實の一例を呈示したものであつて、アツチカの權力の衰ふるに従ひ此種の生活者は自ら次第に影を失つて行つた。さればペルシア戰爭後マケドニアの時代に至る一世紀半に於けるアテネの貨幣交易は經濟狀態に基くものではなくて、政治狀態に依るものと謂はざるを得ぬ。加ふるにアテネの市民中には己が致す勤勞により國家より生計の資を獲たる者と相並んで己が財産即ち大體に於て土地や人間の所有の收益より裕福に生活し得た者が存した。其の數は甚だ大とは云へぬものの如くであるが、併し四〇三年にアツチカに於ける五千の市民が土地財産を有しなかつたことを正當と見るときは一萬五千乃至二萬と算して太過無い。プルタークの傳ふる所によればペリクレスは極めて家計に綿密な人であつて、家に必要な物の外は少しも貯藏せしめる事を許さなかつた。是に由つて見るにペリクレスの時代にも收獲物を賣り且つ浪費を誘致する貯藏を避ける貨幣經濟は寧ろ例外を

爲すものと考へられるのである。

之に對してクセノフオンのオイコノミコス<sup>(48)</sup>には、善良なる主人は同時に善良なる農民であり年を通じて貯藏を爲すこと、穀物を手車にて挽き小麦粉を家にて焼くこと、家婦の直接参加の下に羊毛を紡がしめ、糸を織らしめ、且つ主人や奴隸の衣服を作らしむること等が記されて居る。尙畑の仕事は主人の監督の下に行はれ、主人は毎日奴隸をして農作物を都市へ運ばしめ、市場にて買ふが如きは頗る稀の事に屬する。而して農業及び家計の勞働は専ら奴隸によつて行はれる。即ち此處には封鎖的家内經濟の代表的敘述が窺はれるのである。

然るに他方クセノフオンの主人のイスコマコスの如く貨幣收益を斥けず、費用を越ゆる餘剰を目的とする者があつた。彼の爲す所は土地投機業者の如く確確の地を買ひ、後之を耕作地と爲して買入價格の數倍を以て賣るに在つた。家屋を建築して之を有利に賣放つと同様である。但し要するに當時に在つては農業が他の營利活動の養ひの母であつて、農業の成績良ければ則ち他の職業部門も繁榮するといふ關係にあつたことを悟るべきである。

富裕なる農民は概ね都市に住み其の農業經營は之を管理者に委ねたが、之と同時に自らの手を以て或は一二の奴隸を用ひて土地を耕作する小農も亦存在した。ペロポネサス戰爭の時都市に押寄せて平和を冀つた者は此等の小農であつた。土地を所有せざる市民は小商業及び手工業に従事したことはクセノフオンのキルパイデア<sup>(49)</sup>に明かに述べられる通りである。此他に居留外人と奴隸とが存在し、經濟上重要なる役割を演じたことも

看過すべからざる所である。

畢竟古代アテネの經濟は今日の想像を以ては説明し得ざる様相を呈する。而して其の人口を維持するに其の土地の餘りに瘦せて居る事情よりして學者或はアテネの輸出工業に就て、また輸出貿易に就て語ることを考案したのであるが、ビュヒアーの見解を以てすれば是れを正當とすることは出来ぬ。ビュヒアーに従へばアテネの經濟の支柱は國外の地に樹てられたものである。即ちアテネの人口を養つたものは廣汎なる販賣區域の商品の價格ではなくして、アツチカの海上同盟に参加した諸都市と島嶼とであつた。之れがアテネに貢納を爲しアテネの生計の手段を興へたのであつて、アテネの海上權こそ有利なる工業であつたと見るのである。

以上ビュヒアーはアテネを中心として古代に於ては一部の歴史家が論ずる如く純粹の自己生産を越ゆる大工業は興らず、且つ前提に交換を置く輸出入貿易も盛んに行はれたものではないと云はゞ消極的批評を反對論者に加へ、彼の樹てる經濟發展段階學說を擁護することに努めた。次に一步を進め彼は積極的主張として視野をアテネより希臘全土に擴大し此處に見られる各種の工業部門に關し實證の筆を運ぶのである。而して此時に際しても常に反對論者の敘述を對照せしむることを忘れぬ。即ちマイヤーが希臘の商業區域は極めて大となつたと説き之が爲めには商品の生産が先行したと述べ、更に「甚だ重要な役割を演ずるものは美術品である。即ち輸出の爲めの工業が發展する。斯くてミレトス人は何よりも毛布、紫衣、絨壇等を製造し、之をシバリスを通り伊太利、就中エトルリア人に輸出する。キオス及びサモスが之と競争する。コリント、カルキス、アルゴ

スは其の金屬製品、武器、甕、裝飾品等を以て著名となる。キレーネ、テーベ、シシリイからは最上の車輛が輸出せられ、エギナは小間物類、香油等を製造した。特に重要なものは陶器である。……之によつて吾等は今日も尙個々の工業の競争と商業史の變動とを辿り得る。<sup>(50)</sup>と書いたのに對し、ビュヒアーは羊毛工業、金屬工業、車輛製造、小間物製造及び製陶工業に就き夫々詳密な歴史的立證を試みる。茲に之を紹述することは最早余の行論上冗長に失する恐れがあるから省略することとしたい。唯だビュヒアーの描く「希臘經濟史」を通讀する者は、之によりビュヒアーの經濟發展段階學說が反對論者の攻撃にも拘らず却つて史實の確證を深めらるるか如き感を抱かしめられることを注意するに止めたいと思ふ。然らば古代希臘經濟史に關する他の學者の最近の勞作は之に關して如何に教へるであらうか。以下之を窺つて見やう。

### 三

古代希臘の經濟史に關する近年の收獲は其の數決して少しとせぬ。唯だグロツツ<sup>(51)</sup>並びにトウテエン<sup>(52)</sup>の勞作は夫々英譯せられて研究者の圈を擴めたことと思ふから、余は茲に獨塊に於ける三人の大學教授の最近の業績から必要な資料を獲ることとする。

其の一はケルン大學に於ける古代史教授ヨハネス・ハーゼブレークの著「古代希臘に於ける國家と商業、古代經濟史研究」<sup>(53)</sup>に敘述せられる所のものである。便宜上先づハーゼブレークの立場から述べて行かう。ハーゼ

ブレイクの考ふる所によれば、凡そ歴史が常に問題とするものは其の時代分けである。されば數世紀に亘る史的典據を選擇無しに統一せんとする時は其處に描かれる畫は到底可能とはならぬ。即ちビュヒアーの場合に於て古代の經濟が餘りに低く評價せられたのは、彼がアレキサンダー大王に至る時代を主として着目し其の以後の Hellenismus を無視した爲めと見られるのである。是に於てかハーゼブレイクの信する所では今後問題は、第一に個々の經濟時期を引離して觀察し其の各につき古代の經濟的發展を確定することであらねばならぬ。詳言すれば従來の學者が注意を向けなかつた爲め研究の停頓してゐた Hellenismus。初頭の經濟的發展を吟味すべきである。然りながらハーゼブレイクの著書は此の點を研究對象に置くのではない。彼は Hellenismus 以前に於ける希臘の國權と商業との關係を闡明することを目的とするのである。彼に従へば希臘の政治的都市國家に於ける商業政策を今日の國民的國家の經濟的意味に於けるものと平行的に見んとする見解は正當と謂へぬ。蓋し古代に於ては政治的生活も經濟生活も將た勞働も凡て是れ權力に基いたものであつて、當時の商業政策は畢竟單に食料政策であり、又之と相並んで租税や貢納により國庫を賑はさんとする所の財政政策に過ぎなかつたからである。即ち古代と中世・近世との對立が反映せられる homo politicus と homo economicus との對立が茲に見られるのである。同時に古代希臘の工業を今日の概念構成によつて云はば理想化し、紀元前第五世紀・第四世紀を今日の國民經濟の時期と同一視せんとする説をもハーゼブレイクは之れ幻像的の繪であるとして採らぬのである。

いま特に紀元前第五世紀及び第四世紀に於ける希臘の工業並びに商業に關してハーゼブレイクの敘する所を摘記するに、既にビュヒアーが述べたリシアスの盾製作場のことに因み次の如く言つて居る。「百二十人の奴隸が凡て製作場 Ergastion に用ひられたとは何處にも言はれて居らぬとビュヒアーが力説するのは正しい。(中略)併しながらビュヒアーがリシアスの製作場に於ては單に一時的の設備が考へられると謂ふときは、(中略)彼が茲に公平な解釋の一線を捨てるとの印象を吾々が受けることとなる。(中略)先入見に囚はれざる解釋は茲に問題とせられるものは奴隸を用ひて經營せられる所有者の盾製作場なることの結論に到達せねばならぬ。されば常に吾等は此の製作場に勞働せる勞働者數に關し、従つてまた此の經營の規模に關しては何等與り知らぬといふことを認むべきである。何となれば百二十人の奴隸が大部分製作場に働いてゐたといふ假定は根據が無いからである。」<sup>(54)</sup>又、デモステネスの父の有したといふ三十人の勞働者の經營が大經營であるとして特色付けられるのはハーゼブレイクに言はしむれば當時としては之が普通以上であつたからのことであつて、普通は手工業的小規模のものだつたと見られるのである。従つて製作場の所有者が同時に勞働者と伍して手工業を營んだと見るべきはビュヒアーも説く通りである。

右の經營が貯藏を目的として勞働し、一種の貯藏所を有したことは既にリシアスが七〇〇の盾を藏してゐた事實に顧みて否定し得ぬ。唯だ貨物が生産せられるや否や小賣商人に信用を以て販賣せられたと見るベロツホに對してはハーゼブレイクは賛同し兼ねる。斯かる手續は當時存した信用状態に在つては餘りに複雑であると

考へられるからである。

國內の工業的生産が當時先づ第一に其の地方の欲望を充足したことは謂ふ迄も無い。クセノフオンが大都市と小都市との分業につき次の如く語つてゐるのは、都市の販賣を眼中に置くものである。曰く、「小都市に於ては同一人が寢臺、扉、犁、机等を作り、且つ彼は屢家屋を作り、生計を利することの出来るやう顧客を十分に得らるれば喜んで居る。併しながら多くの工業を營む者が凡てを良く爲し得るといふことは不可能である。之に反して大都市に於ては各手工業者に對する大なる販路がある爲め生計上唯一の工業を以て足れりとする。而もそれも全般に亘る工業たるを要せぬ。即ち或人は男の靴、或人は女の靴を作り、時に或人は單に革の切斷によつてのみ生活し、或人は之を縫ひ合せ、或人は上衣のみを裁斷し、或人は裁斷せられた各部を縫ひ合せる。斯くて手工業の一小部分のみに全く集中する者は勿論また最も良く爲すのである。」<sup>(5)</sup>此の語は都市の販賣が主であつたことを示すものに外ならぬ。然るに同時に此の經營がアテネに於て見らるる如く輸出の爲めに營まれた事も疑ひ得ぬ所に屬する。之に關してはプラトンの「國家篇」に「吾等の派遣せる補助者(商人)にして赤手を以て他所に到り、吾等が吾等の需要する貨物を其地より持歸るべき他所に何等の需要品を持行かぬときは、彼は再び赤手を以て其地より退かねばならぬ。従つて吾等は家に在つて自己の爲めに十分に生産すべきのみならず、彼の需要する物を需要するだけ生産せねばならぬ。即ち吾等の理想國家は多數の農民と他の手工業者とを必要とする。」<sup>(6)</sup>と書かれて居るのである。

されば問題は斯かる輸出の及ぶ範圍並びに度數に存する。換言すれば斯かる輸出は大衆の需要する生産物に關係したか、若しくは特殊の貨物に關係したかである。ビュヒアーはチマルコスの法律に武器の輸出を禁止してゐる點を挙げたけれども、併しプラトーンは理想國家に於ては武器の輸出入は許されること、就申輸出は「吾等の國家が與へると同様に受け得るが故に」許されると論ずるのである。<sup>(57)</sup> 唯だ史實の殘されたる所に從ふときは、メガラの衣服類、アテネの陶器、香油等が輸出せられたことは確かである。他方、ビュヒアーの辯ずる如くアテネへの工業原料品の輸入を否定することは正鵠を得たものと謂ひ得ぬ。鐵、象牙、木材等がアテネへ輸入せられたといふ確證が存するからである。夫れにも拘らずハーゼブレイクの論ずる所によれば、斯かる情況を基礎として當時の希臘の輸出工業を過大に表象するのは誤謬であり、またベロツホの如く數字的にアテネの輸出入額の統計を得んとする大膽なる企ては全然不可能である。

第四世紀に於ける希臘の商業の經營形態は専ら個人商業であつた。合資事業は未だ知られず、通信の制度も之を欠いて居つた。されば商人は其の商品を躬自ら運搬することを要し、一般に運送費の高かつたことはマケドニアよりアテネまでの木材運送が一七五〇ドラクマであつた事實よりして察知することが出来る。海上冒險貸借の場合の利子の高いことも同様に海上に於て曝される危険率の大なることに因つたものである。加ふるに海上の運送は冬期は殆ど中止し、四月より十月に至る約半歳に亘るのみであつたから、斯かる經濟時期に今日の國民經濟的性質を帯びしむるが如きは決して當を得た處置とは謂へぬのである。商人は自身の代りに代表者

を船に乗らしめることもあつたが、また自身船主たり舵手たることもあつたのである。

此の海上運送の困難に劣らぬ他の困難は積込貨物の賣捌きについて生じた。當時の希臘の商人は其の出航に際し商品を何處に賣るべきかを多くの場合明かには知覺して居らなかつた。即ち一定の注文による商品仕送り  
は當時には知られなかつた事項に屬するのである。唯だ復航には必ず何等かの商品を持歸るべきことは強制せられて居つた。要するに此の時代の商業生活たるや甚だ特異なるものであつて、全く偶然、不慮、不安、不確實に充されたものと知るべきである。

事情斯くの如くであるから支拂制度、銀行制度、信用制度等は假令發生したにせよ、頗る幼稚なるを免れず、従つて文書の形式を以てする受領證の如き今日に傳はるものを殆ど見ぬのである。

然らば當時の貨財交換に關する直接の確證如何と言ふに、ハーゼブレイクは次の五つを擧げる。

一、ペリクレスが「都の大なるため全世界から凡ゆる物が流入して吾等は國內の貨財を外國のそれと同様の心易さを以て享樂する」<sup>(58)</sup>と言つてゐる點。プラトンは敢て「精神の商品販賣」、「學問の販賣」、「藝術の販賣」等につき語つて居るのである。

二、喜劇詩人ヘルミツポスの陳述。但しビュヒアーは之を以て前記の如く諷刺と解するが、ハーゼブレイクは右の陳述のままを率直に受入れんとする。

三、ヘルミツポスと同時代にクセノフオンの著として知られる「アテネ人の國家」の中の一節。

四、アリストファネスが、ボエオチア人のアテネ市場に齎したと記したものである。即ち雞、草本類、蘆、ランプの心、鷓鴣、鴨、鵲、山雀、鵝鳥、狐、兔、水獺、狷、猫、栗鼠、鰻等は是れである。

五、アリストファネスの「平和」の歌に現はれ、アテネの市場へ外部より流入したるもの。即ち玉葱、韭、胡瓜、甜瓜、柘榴、奴隸の外套。尙ボエオチア人より齎されるもの。即ち鵝鳥、鴨、鵲、鰻。

之を要するにハーゼブレイクは、古代希臘の經濟的發展を今日の國民經濟時代に見る如き資本主義的大工業並びに之に伴ふ輸出入に該當せしめる見解を一方に於て支持すべからずと爲すと同時に他方に於て其の極端の反對を代表する議論、即ち古代の經濟を封鎖的家内經濟の段階に止めんとするものを緩和せんと努めるのである。別言すればハーゼブレイクの結論はマイヤー、ペロツホ等の論と稍隔りあり、ビュヒアーの説に幾分近き所あるが如く見ゆるのである。

第二に古代經濟史の最近の文獻として余の掲げんとするのはミュンヘン大學の教壇に老軀を厭はず講義を續けるブレンタノの「古代世界に於ける經濟生活」<sup>(5)</sup>である。ブレンタノの立場は右のハーゼブレイクのそれと異り、希臘人を其の以前に歴史の舞臺に現はれたフェニキア人と同様に飽くまでも資本主義的精神の權化と見るのである。従つてブレンタノの敘述はマイヤー、ペロツホに負ふ所が甚だ多く、特にビュヒアーの經濟發展段階の構造に關しては次の如く論評して居る。曰く「此の構造はゲルマン人の中世及び近世の中歐西歐の國民に對して毫も適合せぬ。況んや古代に對してをやである。吾等は商品生産の上に必然的に樹立せられたフェニキ

ア人の國民經濟を知つた。同様のことを吾等はアテネの國民經濟に對しても、また其他商業を營む希臘都市に對して知つた。右の全構造に於ては都市經濟の成立に先行する家内經濟を外國貿易に關聯せしむることは考へられぬこととなる。家内經濟は國民經濟に到達する前に尙ほ都市經濟に遞昇する。國民經濟とは同一の國權の下に服せしめられたる凡ての單獨經濟が交換と分配と及び此の單獨經濟に共通に影響する所の——此の中に在つて慣習の統一が最も重要なものである——一定の具體的根本條件とにより一の全體に結合せられる經濟組織である。併しながら希臘の都市國家が服せしめられた範圍の内部にも貨財は之が消費に達する前に通常幾つもの經濟を通過せねばならなかつた。さればプラトンは己が作つた商品を賣物に出す手工業者の經營をば、他人により作られた商品の販賣と明かに區別する。而して後者にあつては商品を都市に於て販賣する小賣業と賣買により商品を一都市より他の都市へ轉換せしむる商人の業務とを區別する。諸種の希臘都市とカウカサスとクリムより南部伊太利及びシシリーに至る植民地との海商により相互に交換せられた商品が決して生産者の手より直接に消費者の手に渡つたものでないことは、此の商業に關して敘したる後に始めて力説せらるるまでもあるまい。<sup>(66)</sup>

ブレンタノの論ずる所によれば、希臘人はフェニキア人の商業活動と角逐して之を競争場裡より引退せしめた。即ち紀元前第七世紀の始めに既に埃及の西部の三角洲にミレトス人が殖民して埃及王より貨物集散の權利を得た。之に對し埃及王はミレトス人の商業獨占權を沒收し、代ふるに四つの商事會社を設立せしめた。斯く

て商業の發達は各方面の重要な變動を招致するに至つた。

一、商業自身從來は海賊と分離したものでなかつたが、第六世紀に至り海賊の生活を禁止する事となつた。ペルシア戦争はアテネに希臘第一の海上權を獲得せしめ、次いでアテネは希臘商業全般の中心點となつた。されば後に至りペリクレスの時代にはアテネ人の大部分は商業及び工業により生活し、自ら之に參與せざる者は資本を高利にて商業經濟者に貸付け或は工場の設定に利用した。

二、商業の發展は原料の加工を獨立の經濟經營と爲した。換言すれば個々の經濟の基礎として工業經濟が成立したのである。其の前提としては既にマイヤーにより述べられた如く各國より齎された商品が存した。

三、勞働關係の變動は之を見逃し得ぬ。最も多く勞働に用ひられた者は謂ふ迄も無く奴隸であるが、奴隸以外に尙ほ貧しき自由民、小なる手工業者が住んだ。

四、實物交換に代ふるに貨幣交易を以てした。而して之が爲め第七世紀に始めて鑄貨が國家により刻印せられた。

五、社會上及び政治上の變動を生じた。即ち大土地所有者は貨幣を欲し、商業及び海上運送業に参加するに至つた。商業都市には云はば商人貴族が発生したのである。

六、從來の貴族と農民との對立は、新に工業經營者、商人、自由勞働者の發生により外形を改め、政治生活は都市に於て爲されることとなつた。されば農民は都市へ流入し、アツチカの住民は凡てアテネの市民とな

り、アツチカとアテネとは同一のものとなつた。親權國家の代りに法治國家が生れたのである。

右の如く説いてブレンタノは更に古代希臘の兩替商、銀行制度、財政金融が資本主義的發展を促進した所以を縷述する。而してビュヒアーと見解を等しうする佛蘭西のフランコツトが、奴隸を用ひて營める工業は工場風に經營せられたのではなくて手工業的に爲されたものであると主張するのを駁し、また希臘の工業經營には工業に必要な廣き販賣市場を缺いてゐると立論するフランコツトを誤謬であるとして斥けるのである。マイヤー、ペロツホはブレンタノに於て新に有力なる左袒者を見出したと謂つて差支無い。

終りに第三に余が擧げたい勞作はウイーン大學のドプシュ教授の「世界史に於ける自然經濟と貨幣經濟」<sup>(61)</sup>である。ドプシュが此の書に於て企てる所は、從來學者が自然經濟と貨幣經濟を原始太古の時より今日の文化高度に至るまで直線的上昇として區分したのを、史的現象の多様を顧みて不可なりとし、兩者の分離すべからざる所以を史實に照して明かにするに在る。<sup>(62)</sup> 従つてビュヒアーが交換を缺くと見た古代の經濟にも、ドプシュより見れば自然經濟と貨幣經濟とが並び行はれ、ビュヒアーの封鎖的家内經濟は史實に背くものとせられるのである。今、希臘の商工業に關するドプシュの記述を抄せんに次の如くである。

「商業の擴張と工業の發展とは第六世紀に於て都市文化と交通經濟とを盛にした。否、ペロポネサス戰爭は數度の蹂躪にも拘らず正に工業に刺戟を與へたのである(武器製造業)。ペロツホは此の工業發展を敘するに當り、希臘史にとつてのみ考察せられるのではないビュヒアーの根本的誤謬を甚だ適切に述べた。時あつてか紡

ぐことや織ることが家の中にて女子により爲されるといふ事情あればとて、織物は専ら女子の家内仕事により生産せられたと結論すべきものでは決してない。寧ろ自己の欲望の一部に對する此の家内仕事は家内又は家内經濟の以外に織物工業の存在したことを決して除外するものではない。之はメガラに其の主たる場所を有したのである。

アテネは第五世紀に最大の工業都市に繁昌した。全市民に如何なる工業活動も禁ぜられたスパルタに於ては工業は權利無き者及び市外居留者 *Perioekai* により營まれた。農業は自己の欲望を充足し得なかつたが故に、盛なる穀物の輸入が必要だつたのである。<sup>(68)</sup>

ドブシユも亦ブレントノと同様にピユヒアーを去つて、ペロツホ、マイヤーに就かんとする者と謂ふことが出来る。

#### 四

以上余はピユヒアーの經濟發展段階學說を中心とする *Polemik* を敘し、次にピユヒアー自身の「希臘經濟史」によつて彼の自説擁護を見、進んで之に觸るる最近の經濟史家の所説を窺つた。然らば畢竟ピユヒアーの學說は支持せらるべきものなりや否や。今や之に對する余の最後の答を提出すべき階梯に到達した。余は答へねばならぬ、而して答へる。ピユヒアーの學說は史的現象の多元性を一元的の圖式に攝取せしめんとするもの、典

據の豊富を加ふるにつれて破綻を見る運命を擔ふものである。

去り乍らビュヒアーが一個の歴史法則を經濟生活の變動の上に導入せんとした企圖そのものは吾等のゆめ閑却してはならぬ所である。されば近時ニューロンベルク大學のプレースラーが試みたる「獨逸經濟發展の時期」<sup>(64)</sup>の如きは明かにビュヒアーの企圖を多元的に把握せんとしたる一産物と見るべきものである。プレースラーの時代分けは彼自身右の著書の附録に一表を以て明示してゐるやうに左の如きものである。先づ「發展の時期」が劃せられる。

古 代

(基督紀元前五〇年——基督紀元後五〇〇年)

中 世

前	期	(五〇〇年——一二五〇年)
中	期	(一二五〇年——一五二五年)
後	期	(一五二五年——一八〇七年)

近 世

第 一	期	(一八〇七年——一八三四年)
第 二	期	(一八三四年——一八七九年)
第 三	期	(一八七九年——一九一四年)

次いで經濟部門が農業工業及び商業の三部門に分たれ、此の三部門が上の發展期に於て如何なる形態を採つたかが表示せられる。進んで經濟思想並びに經濟の政治的組織形態が發展期に照應せしめられ、最後に經濟段階が交換の擴がり及び商業の仕方といふ二つの標準に従つて發展期に命名せられる。即ちプレースラーにあつ

ては、交換の擴がりに従ひ古代と中世前期とは家内經濟の段階に屬し、中世中期より近世の第三期に至る時期は交易經濟の段階に屬する。尙交易經濟の段階の中、中世中期と中世後期とは都市經濟、近世の第一期より第三期までは國民經濟に當てしめられる。他方、商業の仕方に従ふときは古代と中世前期とは自然經濟の段階に入り、中世中期より近世第三期に至る時期は貨幣經濟の段階に含めしめられ、同時に貨幣經濟の段階の中、中世中期より近世の第一期までは現金貨幣經濟と名付けられ、近世の第二期と第三期とは信用貨幣經濟と唱へられるのである。

併しながら此のプレースラーの圖式を以てしても、獨乙經濟發展の複雑多様なる相を如實に映し得たるものと謂ひ得るが爲めには尙疑問を容れる餘地を幾多存する。是れ多様を捕へんとするに多様を以て蔽はんとしたが爲めに外ならぬ。一面科學たると同時に他面藝術たる歴史の本具する難問を吾等は正に茲に覺る所以である。

——一九三一年八月——

附記 本篇のテーマは夙に五年前ビュヒアーの *Beiträge z. Wirtschaftsgeschichte* を始めて入手せる時に余の見出したものである。唯だ當時余はマイヤーの *Wirtsch. Entw. d. Allert.* を見ることを得ざりし爲め筆を執り得なかつた。一昨年伯林大學のセミナーで讀書室にて之を繙く機會を得たと同時に稿を起した本篇は日本へ歸つてから完成する運びとなつた。然るに其の間に本篇を捧げんと欲した福田徳三博士を吾が學界は永久に喪つた。他方ビュヒアーも昨一九三〇年十一月十二日八十二歳の高齡を以て長逝せられた。稿を了へて感慨が深い。

- Ⓔ Karl Bücher, Die Entstehung der Volkswirtschaft. 1. Aufl. (Sechs Vorträge), Tübingen 1893. (VI+304) SS. 14—15.  
Zweite, stark vermehrte Auflage (Vorträge und Versuche), Tübingen 1898. (X+395) SS. 57—58.  
Dritte, vermehrte und verbesserte Auflage (Vorträge und Versuche), Tübingen 1901. (XI+466) SS. 107—108.  
12. u. 13. Aufl. (Vorträge und Aufsätze), Tübingen 1919. (VIII+475) S. 91.  
Vgl. Karl Bücher, Volkswirtschaftliche Entwicklungsstufen. Grundriss der Sozialökonomik I. Abteilung I. Teil, Tübingen 1914. S. 10. 2A., Tübingen 1925. S. 10.
- Ⓕ Eduard Meyer, Die wirtschaftliche Entwicklung des Altertums. Ein Vortrag, gehalten auf der dritten Versammlung Deutscher Historiker in Frankfurt a. M. am 20. April 1895. Jena 1895. S. 7.  
Wieder abgedruckt in seinen, Kleinen Schriften. Zur Geschichtstheorie und zur wirtschaftlichen und politischen Geschichte des Altertums. "Halle a. S. 1900.
- Ⓖ Ed. Meyer, a. a. O. S. 28.
- Ⓖ Ebenda S. 47.
- Ⓗ K. Bücher, Die Entstehung d. V. 2A., 1898. Vorwort S. X.
- Ⓘ K. Bücher, a. a. O. 3A., 1901. S. 447 ff.
- Ⓛ K. Bücher, Arbeit und Rhythmus. 4 A., Leipzig und Berlin 1909.
- Ⓜ Georg von Below, Probleme der Wirtschaftsgeschichte. Eine Einführung in das Studium der Wirtschaftsgeschichte. Tübingen 1920. SS. 158—159.
- Ⓝ Ebenda S. 165.

- (10) Ebenda S. 173.
- (11) Ebenda S. 183.
- (12) Ebenda SS. 188—191.
- (13) 村松恒一郎稿「Max Weber の Idealtypus 概念に就て」商學研究第三卷第三號所載參看。
- (14) 本多謙三稿「歴史的・社會的學問特に經濟學の方法論に就て」思想第七十二號所載參看。
- (15) Max Weber, Die „Objektivität“ sozialwissenschaftlicher und sozialpolitischer Erkenntnis, Archiv für Sozialwissenschaft und Sozialpolitik. Bd. XIX (Der neuen Folge I. Band). Tübingen 1904. S. 65.
- Wieder enthalten in seine „Gesammelte Aufsätze zur Wissenschaftslehre“. Tübingen 1922.
- (16) Ebenda S. 65.
- (17) Robert Wilbrandt, Oekonomie : Ideen zu einer Philosophie und Soziologie der Wirtschaft. Tübingen 1920.
- (18) R. Wilbrandt, Geschichte der Volkswirtschaft. Einführung in die Volkswirtschaftslehre. Bd. II. Stuttgart 1924. SS. 27—28.
- (19) Werner Sombart, Die gewerbliche Arbeit und ihre Organisation. Archiv für soziale Gesetzgebung und Statistik. Herausgegeben von Heinrich Braun. Bd 14. Berlin 1899. S. 342, Anm. 2.
- (20) Ebenda S. 391.
- (21) Ebenda SS. 385—386.
- Siehe auch W. Sombart, Der moderne Kapitalismus. I Bd. Die Genesis des Kapitalismus. Leipzig 1902. SS. 54—55.
- W. Sombart, Die Ordnung des Wirtschaftslebens. 2. A., Berlin 1927. S. 13.
- (22) K. Bücher, Die Entstehung d. V. 3 A. Anhang. SS. 454—455.

- (23) W. Sombart, Der moderne Kapitalismus. I Bd. Leipzig 1902. S. 55. Anm. 1.
- (24) W. Sombart, Die Ordnung d. W. 2A. SS. 12—14.
- (25) W. Sombart, Archiv für soz. Gesetzg. und Statistik. Bd XIV (1899), S. 402.  
Siehe auch „Der moderne Kapitalismus“. Bd. I. Leipzig 1902. S. 67.
- (26) W. Sombart, Archiv f. soz. G. u. S. Bd XIV. S. 392. Anm. 1.  
Auch, Der moderne Kapitalismus. I Bd. Leipzig 1902. S. 67.
- (27) Losa Luxemburg, Einführung in die Nationalökonomie. Herausgegeben von Paul Levi. Berlin 1925. S. 139.
- (28) Ebenda SS. 140—141.
- (29) Ebenda SS. 141—143.
- (30) Ebenda S. 144.
- (31) 拙稿「唯物史觀の相對性」商學討究第三卷下冊參看。
- (32) 福田博士「經濟學全集」第一集一二二九頁。
- (33) Festgaben für Albert Schäffle zur siebenzigsten Wiederkehr seines Geburtstages am 24. Februar 1901. Tübingen 1901.
- (34) Karl Bücher, Beiträge zur Wirtschaftsgeschichte. Tübingen. 1922.
- (35) Festgaben, SS. 195—196. Beiträge, S. 3.
- (36) H. Francotte, L'industrie dans la Grèce ancienne. Tome I, Bruxelles 1900.
- P. Guiraud, La main-d'oeuvre industrielle dans l'ancienne Grèce (Bibliothèque de la faculté des lettres XII), Paris 1900.
- (37) Jakob Burckhardt, Griechische Kulturgeschichte.

- (38) Blümner, Technologie u. Terminologie der Gewerbe u. Künste bei Griechen u. Römern. Die gewerbliche Tätigkeit der Völker d. klass. Altert. 1869.
- Büchschütz, Besitz und Erwerb im griechischen Altertum. Halle 1869.
- Die Hauptstätten des gewerbefleißes im kl. Altertum. 1869.
- (39) Julius Beloch, Die Bevölkerung der griechisch-römischen Welt. Leipzig 1886.
- (40) ditto., Griechische Geschichte.
- (41) Kurt Breysig, Kulturgeschichte der Neuzeit II, 1 (Urzeit—Griechen—Römer), Berlin 1901. S. 95 und 112 f.
- (42) Beloch, Griech. Gesch. II, S. 347.
- (43) Zeitschrift für Sozialwissenschaft II (1899), S. 18—26.
- (44) Jahrbücher für Nationalökonomie und Statistik. III. Folge 18. Band (1899), S. 626—631.
- (45) August Böckh, Staatshaushalt der Athener. Berlin 1817. 2. Aufl. 1851.
- (46) Aristoteles, Oikon. I. 6, 2.
- (47) ditto., Vom Staat der Athener. K. 24.
- (48) Xenophon, Oikonomikos. K. 7, 25. 36. 41; 8, 22; 11, 18.
- (49) ditto, Kyr upaideia. VIII, 2, 5.
- (50) Ed. Meyer, Die wirtsch. Entwicklung, S. 19.
- (51) Gustave Glotz, Ancient Greece at Work: An Economic History of Greece From the Homeric Period to the Roman Conquest. Engl. Transl. by M. R. Dobie, London 1926.

- (52) Jules Toutain, *The Economic Life of the Ancient World*. Engl. Transl. by M. R. Dobie, London 1930.
- (53) Johannes Hasebroek, *Staat und Handel im alten Griechenland: Untersuchungen zur antiken Wirtschaftsgeschichte*.  
Tübingen 1928.
- (54) Ebenda SS. 76—77.
- (55) Xenophon, *Kyrop.* 8, 2, 5.
- (56) Platon, *Staat*. 370 e.
- (57) ditto, *Cesetze*. 847 d.
- (58) Thukydides, II. 38.
- (59) Lujo Brentano, *Das Wirtschaftsleben der antiken Welt: Vorlesungen gehalten als Einleitung zur Wirtschaftsgeschichte des  
Mittelalters*. Jena 1929.
- (60) Ebenda S. 42 f.
- (61) Alfons Dopsch, *Naturalwirtschaft und Geldwirtschaft in der Weltgeschichte*. Wien 1930.
- (62) Ebenda. Vorwort.
- (63) Ebenda. S. 73.
- (64) Hans Proesler, *Die Epochen der deutschen Wirtschaftsentwicklung*. Nürnberg 1927.